24　田中弥性園所蔵の善本古医籍（明版）

○小曽戸　洋[1]・田中　祐尾[2]

大阪八尾の田中弥性園は、田中元允（一七二八～一七九六）に始まり、その子元緝（祐馬・緑窓、一七六七～一八二五）によって確立された医療学舎である（山中浩之「在村医家の形成と儒教」『大阪の歴史と文化』）。元緝は和田東郭・伊良子光顕に医を、また尾藤二洲・片山北海に儒を学び、木村蒹葭堂などと交わった当時八尾における随一の文化人であった。墓碑銘は貫名海屋が撰している。発表者の田中祐尾はその子孫で、今なお八尾で医を業とし、弥性園の家伝文化財を保持している。そのうちには医学史料として貴重な古文書・書画類、そして書籍が数多くあり、近年一部は世に紹介されたものの、とりわけ古医学書についてはいまだ充分な調査がなされるに至っていない。そこで今回それらについて検討を行った結果、弥性園の家伝蔵書中にはきわめて伝世稀な漢籍医書が含まれていることが判明した。以下主だったものについて報告する。

『丹渓心法附余』二十四巻十二冊。明版。

本書は明の方広の撰になる朱丹渓流医学の医学全書。日本でも寛文十一年（一六七一）に翻刻されている。弥性園蔵のこの版本は見返し扉に「邵武官板丹渓心法附余・書林楊初虹梓行」、巻末刊記に「武陽中憲大夫呉国倫精校／書林楊氏梓行」とある。王重氏『善本書提要』に同一版と思われる米国国会図書館所蔵本（多紀元堅旧蔵）を著録し、嘉靖間（一五二二～六六）刻本を鑑定している。あるいは万暦（一五七三～一六一五）の補刻を交えるか。ともかく今から四百年はゆうに遡る稀覯本である。

『袖珍方大全』四巻四冊。明版。

本書は明の朱橚の命により李恒らが編纂した医書で、諸版があり、明代広く流布した。本版は毎巻首に「魁本袖珍方大全」と題し、洪武二十五年（一三九二）後序の末に「嘉靖己亥仲秋吉（以下欠損）」の刊木記があるから、明らかに嘉靖十八年（一五三九）の刊本である。本書の同年刊本は中国に二点ほど現存品が知られる。

『仁斎直指方論』二十六巻十八冊。明版。

本書は宋の楊士瀛の撰になる医方書で、景定五年（一二六四）の成立。現伝最古本は台湾故宮博物院所蔵の元刊本（『経籍訪古志』著録江戸医学館本）が唯一で、本版はこれに基づく嘉靖二十九年（一五五〇）の翻刻本である。この嘉靖版も日本・中国の図書館に数部が伝存するのみで、『龍谷大学大宮図書館和漢古典籍貴重書解題』にも同版が採録される珍本である。

『奇効良方』六十九巻十七冊。明版。

本書は明の董宿の原編、方賢・楊文翰の補編になる大型の医方書。『太医院経験奇効良方大全』とも称し、成化七年（一四七一）太医院刊本が初版。日本へも室町時代すみやかに日本にもたらされ、当時の知識階級の医家に珍重された。本版の総目末尾には「正徳辛未孟夏／日新書堂重刊」の木刊記があり、正徳六年（一五一一）の刊本であることがわかる。本版もごく稀少本で、台湾故宮博物院所蔵の同版（野間三竹旧蔵）が先年『故宮珍蔵中医名著三十四種』に影印収録されてはじめて一般の研究者の目に触れるようになった。田中弥性園蔵書中、最古版であろう。

『医学綱目』四十巻三十冊。明版。

本書は明の楼英の撰になる医学全書で、十四世紀後半の成立。刊行は十六世紀に入ってから。現在、嘉靖四十四年（一五六五）曹灼序刊本の存在が知られ、日本では万治二年（一六五九）の翻刻がある。本版は嘉靖曹灼本とは異版であるが、同じく嘉靖頃の刻かと思われる古版で、今後の検討が期待される。

以上明版五種に言及したが、このほか清刊本はもとより、『活人事証方』『衛生宝鑑』『世医得効方』『魏氏家蔵方』のような通常流布していない写本、『御薬院方』『太平聖恵方』の和刻本などをはじめとする稀覯本がある。田中弥性園の蔵書の質は一般医家としては群を抜いて高い。

（1）北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）
（2）大阪市立大学医学部・医史学）